

スペシャル・トーク・ライブ 「もっと知りたい！出版の今と図書館の本選び」

年々厳しさを増す出版界および「選書」の重要性とその課題



2月22日(日)午後、葛飾図書館との共催で行った友の会スペシャル・トーク・ライブ『もっと知りたい！出版の今と図書館の本選び ～出版・流通の現状と図書館選書の課題とは～』が開かれました。会場には60名近くの参加者が集まり、川島事業委員長の司会のもと、高木館長から二日前の区議会で10月中旬に開館する“新図書館”に関する条例が可決され、名称が正式に「中央図書館」と決定したとの挨拶を受けました。また川越友の会会長が多数の参加を得たことに感謝するとともに、中央図書館のオープニング・イベントを会として応援していくことや、友の会への参加の呼び掛けが行われました。

そして第1部として、横井真木雄氏(吉川弘文館営業部長)によるユーモアの溢れた語り口での「出版界に今何が起きているのか」と、豊富な資料に基づいた大森輝久氏(東京学芸大学附属図書館・情報基盤課長)による「ザ・選書」と題するそれぞれ1時間にわたる講演を受けました(講演要旨は2頁に掲載)。第2部は参加者の質問を交えてのフリーディスカッションを行い、終了予定時間をオーバーしてライブは終了しました。なお、この様子は後日かつしかケーブルテレビでも放映されました。

### 友の会の今後の活動予定

#### “友の会ウィーク”の準備や“リサイクル市”への協力などを検討

友の会は現在、事業委員会を中心に、6月中旬に予定されている葛飾図書館主催の“レコード・CDのリサイクル市”への作業と開催当日の協力を進めようとしています。

また10月の中央図書館の開館にともなうオープニング・イベントが2週間程度経過した後、“友の会ウィーク”と銘打って、9日間にわたる色々なプログラムを企画・検討中です。4月にはこのウィーク開催に向けての実行委員会の結成と参加を、図書館に関わる諸団体などによびかけ、5月には第1回の説明会を予定しています。さらに友の会は、開館に当たっての館内案内や自動貸出機及び検索端末機の扱い方を利用者に助言ができるように、図書館と連携・協力しながら今後、指導を受けていきます。

なお、友の会の第2回総会は5月16日(土)午後2時に開催します。別途案内します。

\* 3月14日(土)2時～ 役員会 \* 3月21日(土)2時～ 事業委員会

\* 4月18日(土)2時～ 事業委員会 (いずれも葛飾図書館3階第2会議室)



## 『もっと知りたい！ 出版の今と図書館の本選び ～ 出版・流通の現状と図書館選書の課題とは～』

講演テーマ 「出版界に今何が起きているのか」 横井真木雄氏（吉川弘文館営業部長）

**書籍販売額と書店の減少が顕著** 若年読者の増加と図書館の充実を期待したい

残念ながら現在の出版業界は元気がない。96年を境に書籍販売の売上高は右肩下がりになっている。広告収入の落ち込みも著しい。また出版社から販売会社（取次）を経て、書店を通して読者にというルートが全体の7割近くを占めているが、町の書店数の減少も凄まじい。

出版界には“定価販売”という「再販制度」と、ほとんどが“返品自由”という「委託制度」なる特殊な事情があり、これがこれまでの業界を支えてきたのは事実だ。しかし後者は崩れつつある。

また販売会社間や、販売会社と出版社というような業界再編が始まりつつある。販売売上額の減少は40%を超える返品率の上昇、ロングセラーの減少にも原因がある。また家計調査の結果でも書籍購入費は減り続け、読者層は高年齢化している。いわゆる学生を含め若者の文字離れ、本離れである。さらに今までの紙とインクからネット・ライブラリーというインターネットによる情報取得（ディスプレイ上での読書？）へと世界は変化して行くであろう。しかしそれらによる問題点も山積している。けれどもやはり図書館の存在は大きい。小・中学生の読書愛好家に期待し、レファレンス機能の充実と選書能力のアップも必要である。



講演テーマ 「ザ・選書」 大森輝久氏（東京学芸大学附属図書館・情報基盤課長）

**“選書と予算消化はちがう”** 改革の必要がある図書館の本選び



新聞に掲載される書評や広告を集めても膨大なスクラップブックになる程、多種多様な出版物がある中、選書には欠かせないツールの問題がある。「週刊読書人」「図書新聞」「出版ニュース」を備えていない、さらにはその存在も知らない図書館が数多くある。これでは図書館員が本について教えられない。また各種の「文化賞」や「文学賞」を受賞した書籍さえ揃っていない図書館もある。

選書には前準備、選書業務、そしてアフターケアの3過程があり、選んだ本がどう生かせるのかということが最も重要で、それには選書の統括者の存在が必要である。それとともに“選書に王道はない”ので図書館としては、本の紹介と読

まれるための工夫をしなければならない。

図書館の発展を拒んできた要因としては、図書館員が「本の世界」を教えられていないこと、図書館機能を理解しない、グローバルな視野が狭いこと、さらには利用者の観点から図書館サイドに足りないことなどが挙げられる。知的な小さな共同体として、またコミュニティーの再建という図書館の役割は重要であり、情報の発信元として大いに機能してもらいたい。

## 水元図書館 = 爽やかな水辺のライブラリー =

葛飾区の北部、水元公園近くにある水元図書館はタイル貼りのシックな外観と、いたるところに見られる設計上の苦心が、なかなかの印象を与える。訪問者4人も館内のゆとりに一驚。この館が建設された27年前の1982年といえば、この辺りは田園風景ゆたかな緑の郊外そのものであったろう。



対応していただいた佐藤館長、そして司書の山本さんのお話から、熟年者が多い土地柄、大活字本を含む年配向けの本、年金関係書などの選書に力を入れているとか。しかしこの周辺は小学校も多く、児童書の売れ行きも（利用者も）目立つという。そういえばこの館には贅沢にも児童の専用出入口があり、おそらく開館しばらくはあふれるほどの子どもたちが、ここでたくさんの本を読みふけたことであろう。

館内の設備はいつでも同じ背の高いラックが占領しているが、目線を下げるため最上段の本の除架がすすんでいる。そのため蔵書の量的圧縮に苦労している様子。

各月のテーマは17名のスタッフがペアを組んで5月の「お出かけしよう!」とか7月の「夏に。」とかアイデアを絞る。しかし11月はなぜか「平成20年。昭和を振り返る」であった。おもしろい。

幼児のためのしおり「こあゆ」（月刊）そしてジュニアのための「よしきり」（隔月刊）なども。豊富な紙芝居のストックをベースにボランティア活動も盛ん。蔵書数は11万冊。検索マシンなども区内の他館とおなじ標準装備。2階は閲覧室のみでじっくり読書や学習に専念できる。

訪問を終えて外へ出ると金町駅への広い道路が一直線。水元公園の散歩を終えて立ち寄るか、公園での読書のための一冊を手取るか、雑踏地には無いゆとりの立地条件でもある。（取材/高橋、中里、原田、西村）

## 亀有図書館 = おしゃれな ヤングアダルト YA コーナー =

「新築みたい」。5階建て都営住宅の1,2階に位置するこの図書館のオープンは1981年だが、昨年末に外装のお色直しを終えたばかりで壁の色はしみ一つない暖かな白。耐震強度もすでに診断済みと平野館長に伺った。蔵書は11万冊強。1階は貸し出しカウンターをはさみ右が一般室、左が児童室。一般室側では、逆コの字型に奥まった隅に位置する「やんかめコーナー」（YA対象）が居心地よげで配色もお洒落。書架の列に向かうと、棚の側面に蔵書の配置図が貼り出してあり、初めて訪れるものにはとてもありがたい。



閲覧室は大小2箇所あり、ガラスで囲われた「小」はグループ学習用とか。地域館ごとに設けられている特別コーナーがこの館では「環境問題」だった。今後ますます切実さが増しそうなテーマである。館作成のリーフレットは一般向けの「図書館だより」、YA向けに「やんかめ通信」が置かれている

児童室は広めで明るい印象。じゅうたんのコーナーでは「絵本よみ」もある。壁にいくつか設置されたカーブ・ミラーが不思議だったが、構造上カウンターから見えない個所をカバーするため、児童の安全対策なのだそうだ。2階の会議室では月1回の映画会のほか児童向けのおはなし会ももたれ、取材当日は職場体験学習中の中学生が参加する姿が見られた。カウンター業務のみならず、行事があれば関わってもらおう方針という。

土・日曜は親子連れの来館が多いそうだが、都営住宅の中にありながら住人の利用はそれほどでもないというのが意外だった。館長の悩みは未返却本と、利用者数の伸び悩み。少しでも多くの人に利用してほしいという図書館人としての熱意が伝わってきた。（取材/林、中里、西村）

ダニエル・キイス著「アルジャーノンに花束を」(早川書房)

同一タイトルで2002年に放送されたフジテレビのドラマを覚えておいででしょうか。ユースケ・サンタマリアが主人公で、その恋人役が菅野美穂でした。毎週映し出される校舎が首都大で、キャンパスがロケに使われていました。さて物語の粗筋は、主人公がアルジャーノンという名前のネズミと共に知能増大の実験台に使われ、やがて予想外の終末を迎えるというストーリーです。この物語は何の寓話でしょうか。人は利口になるほど不幸になる。人間にとって大切なのは愛と思いやりだ。近代合理主義への批判、つまりポストモダニズムだ。・・・など。私は「多様な価値観」を認めようというのが著者の主張であると思えました。読者は世界27カ国で900万人にのぼるといいます。まさに心を打つ不朽の名作。これまでにSFには縁の遠かった方にもお薦めしたい1冊です。

葛飾図書館友の会副会長 朝野熙彦あきのひろひこ(首都大学東京大学院教授)



「葛飾図書館友の会」で一緒に活動してみませんか！

\* 入会のご案内とその手続き \*

『友の会』は多くの会員によって活動しています。中央図書館開館を控え、図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々に、是非ご入会いただき、あなたのアイデアを少しずつ実現してみませんか？ 入会にあたっては葛飾図書館に入会届けをご提出の上、年会費（一般会員1,000円、賛助会員一口2,000円）を下記の口座へ納入して下さい。なお葛飾図書館での直接納入はできません。

「通信欄」に一般あるいは賛助会員か否を明記の上、21年度年会費とご記入下さい。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。恐れ入りますがご負担をお願いいたします。

|        |      |                |
|--------|------|----------------|
| ゆうちょ銀行 | 口座番号 | 00100-7-392065 |
|        | 口座名称 | 葛飾図書館友の会       |

問い合わせ・連絡先は下記の通りです。

葛飾図書館担当者(玉川さん、吉村さん、清水さん) 03-3607-9201

多くの皆様のご加入をお待ちしています。

友の会広報委員会

- 委員長 高橋 久郎
- 副委員長 中里 隆二
- 赤川 芳晴
- 西村 喜久子
- 林 才三
- 原田 匡子
- 宮廻 昌子
- 横嶋 昌一
- 石井 彦一

朝八時過ぎ、自転車をとばして小学校へ。始業時間前の朝読書、読み聞かせ当番の朝、「おはよう」と声をかけると、子どもたちは元気に「おはようございますあす」と声を返してくる。教室に入ると子どもたちは椅子を半円形に並べて待っていてくれる。十五分〜二十分程の時間の中で読んだ本が、どれだけその心に届いたのかなと感じているが、街中で出会った子どもが「あ、この前本を読んでもくれたおばさん！」と声をかけてくれると「また行くからね」と返事をしてしまう。私の生きがいの一つになつていく。でも、一年生から六年生まで、それぞれの学年に応じたの本選びが難しい。また、保育園や児童館などで「お話会」や「紙芝居」をやる場合にも、乳児、幼児などの対象に対してどんなプログラムにしたら適当なのかいつも考えてしまうところである。そんな時は、図書館の児童達が何よりの拠り所となり、味方となってくれる。だから、私にとって図書館の児童達はドラえもんのポケットである。(原田)

